

# 空也と辺地修行

寺内 浩 (愛媛大学名誉教授)

## Kūya and Ascetic Training in Remote Areas Hiroshi TERAUCHI, Professor Emeritus, Ehime University

The Kūyarui was written by Minamoto no Tamenori (941?-1011) to mourn the death of Kūya (903-972) and to commemorate his achievements. Minamoto no Tamenori lived at about the same time as Kūya and wrote based on the testimony of Kūya's disciples and Kūya's writings, which makes the Kūyarui highly credible as a historical document.

According to the Kūyarui, Kūya practiced asceticism for several months in Yushima, but was unable to see Kannon Bosatsu, so he abstained from food, burned incense on his arms, and did not move or sleep day or night for seven days. As a result, Kannon Bosatsu appeared to him on the last night. Practitioners who went to remote areas during this period practiced ascetic training at sacred places throughout Shikoku. Thus, the Kūyarui is extremely valuable as a concrete description of the ascetic practices of people who went to remote places.

Kūkai also participated in severe ascetic training at Tairyonotake in Awa Province (Tokushima) and at Muroto Misaki in Tosa Province (Kochi) and was able to encounter Kokūzō Bosatsu. The frontier ascetic practitioners of that time undertook ascetic training with the aim of gaining mystical experiences like Kūkai and Kūya.

### 1 『空也誄』と源為憲

空也 (903~972) は平安時代中期の僧である。出身地は不明で、出自は皇族ともいわれる。空也は市中を巡りながら人々に念仏を勧めたので、「市聖」と呼ばれるが、天慶元年 (938) に京都へ戻るまでは諸国を遍歴していた。

『空也誄』(誄は、死を悼み、その人を讃える文章) は天禄3年 (972) の空也の死後まもなく、源為憲 (941? ~1011) がその死を悼んで著したものである。源為憲は平安中期を代表する文人で、『口遊』(貴族の子弟向けの初歩的教科書)、『三宝絵詞』(仏教説話集) などの著作がある。一方、仏教信仰にも篤く、慶滋保胤らとともに勧学会(僧侶と文人が合同で念仏や作文を行う行事)を催すなど、浄土思想に深い関心を持っていた。彼が『空也誄』を書いたのは、空也の死を悼み、その業績を讃えるためであった。為憲が天慶4年 (941) 生まれとすると、32歳の時に空也が亡くなったことになる。空也が諸国で修業していた時代は為憲が生まれる前だが、晩年の空也が京中で活動していた様子を彼が実見していたことは間違いない。また、『空也誄』には、執筆にあたって「遺弟子を本寺に尋ね、又先後に修する所の法会の願文、唱ふる所の善知識文、数十枚を集め」たとある。つまり『空也誄』は、空也とはほぼ同時代に生きた源為憲が、空也の弟子から聞いた話や法会の願文などをもとに書いたものであり、史料としての信憑性は高いといえることができる。

### 2 辺地修行者としての空也

『空也誄』には「少壮の日、優婆塞を以て、五畿七道を歴り、名山靈窟に遊ぶ」とあり、空也は若い時に在家のまま全国を遍歴し、靈験地を訪れていた。四国に来た時には、辺地修行者として四国各地にある靈験所を巡り歩いていたのであろう<sup>(1)</sup>。

空也は諸国を巡りながら、野原に放置された遺骸を火葬し、人々が難儀している険しい山道を整備するなどの社会事業を行った。20歳を過ぎたころ、空也は尾張国国分寺で出家し、播磨国揖保郡にある峯合寺で経論を学んだ。そして、修行のため湯嶋にやってきた。『空也誄』は修行の様子を以下のように記している。

阿波・土佐両州の海中に湯嶋有り、地勢靈奇にして、天然の幽邃なり、観世音菩薩像有りて靈験掲焉なりと伝ふ、上人、観音に値ふ為、故に彼の嶋に詣づ、六時恭敬し、数月練行す、終に見る所無し、爰に

粒<sup>りゅう</sup>を絶ちて像に向ひ、腕上に香を焼く、一七日夜、不動不眠なり、最後の夜、向かふ所の尊像<sup>いちしち</sup>、微妙<sup>みみょう</sup>の光を放つ、目を瞑れば則ち見え、瞑らざれば見ゆること無し。是に於て香を焼く一腕に、焦痕<sup>しょうこん</sup>猶ほ遺れり、

(阿波・土佐両国の境の海中に湯嶋があった。不思議な形をしていて、奥深い静けさのある島だった。そこには観音菩薩像があり、靈験あらたかと伝えられていた。上人は観音菩薩に出会うため、その島に詣でた。終日慎み敬い、数か月練行につとめたが、観音菩薩を見ることはできなかった。そこで、穀粒を絶って観音菩薩像に向かい、腕の上に香を焼いて、七日間昼も夜も動くことも眠ることもなかった。最後の夜、観音菩薩像から深遠な光が放たれた。観音菩薩が、目を閉じると見え、目を開けると見えなかった。香を焼いた腕には焦げ痕が残っていた。)<sup>(2)</sup>

石井義長氏は、「六時恭敬」を『如意輪陀羅尼經』による修行、すなわち1日6回、如意輪観音の陀羅尼をそれぞれ1080回唱える修行とする<sup>(3)</sup>。しかし、この修行を数か月続けても観音菩薩に出会うことはできなかった。そこで、食事を絶って腕上に香を焼き、7日の間不動不眠でひたすら祈ったところ観音菩薩が現れたのである。こうした苦修練行は、空也だけでなく当時の辺地修行者が四国各地の靈験所で行っていたものであろう。『空也誄』は当時の辺地修行者の修行内容を具体的に描いたものとして非常に貴重といえる。

### 3 空海との比較

『空也誄』には「少壮の日、優婆塞<sup>うばそく</sup>を以て、五畿七道<sup>めぐ</sup>を歴り、名山靈窟<sup>みやうりょう</sup>に遊ぶ」とある。空海も、『性靈集<sup>しゅう</sup>』巻9に「空海少年の日、好んで山水を渉覽せしに」とあるように、出家前に四国を中心に各地を遍歴していた。空海との共通性がうかがえ、興味深い。

『三教指帰<sup>さんこうしき</sup>』序文によると、空海はある僧から虚空蔵聞持法<sup>こくうざうもんじほう</sup>を教えられ、阿波国の大滝嶽と土佐国の室戸岬<sup>むろ</sup>できびしい修行に臨んだ。その様子を『三教指帰』は「阿国大滝嶽に躋り攀ぢ、土州室戸崎に勤念す、谷響<sup>ひびき</sup>を惜しまず、明星来影<sup>らいえい</sup>す(阿波の国の大滝嶽によじ登り、土佐の国の室戸崎で一心不乱に修行した、谷はこだまを返し(修行の結果があらわれ)、(虚空蔵菩薩の化身である)明星が姿を現わした)」<sup>(4)</sup>としている。

また、空海弟子の真濟<sup>しんぜい</sup>著といわれる『空海僧都伝』は、修行の様子を次のように述べている。

名山絶巘<sup>ぜっけん</sup>の処、石壁孤岸<sup>こがん</sup>の奥、超然として独り往いて淹留苦練す、或いは阿波大瀧の峯<sup>のぼ</sup>に上りて修念すれば、虚空蔵の大剣飛び来りて、菩薩の靈応<sup>あらわ</sup>を標す、或いは土左の室土崎において、目を閉ぢて観ずれば、明星、口に入りて、仏力の奇異を現ず、その苦節たるや、すなわち嚴冬の大雪<sup>かつのう</sup>には葛衲を着て、顕露行道し、炎夏の極熱には穀粒を絶って、日夕に懺悔す、

(名山のきりたった絶壁のところや、淋しい海岸の石窟の奥で、世俗を離れて单身逗留して苦行した。ある時は、阿波の大滝嶽にのぼって、一心に修行していると、虚空蔵菩薩の大剣が飛んできて菩薩の靈験があった。ある時は、土佐の室土(戸)崎において目を閉じて観念をこらしていると、明星が口の中に飛び込んで来て、仏力の奇瑞靈異が現われた。その苦しみに耐えることたるや、厳しい冬の大雪の降る日に葛の下着だけを着たままで歩き、夏の炎暑には五穀などの食物を断って、朝も夕も懺悔の生活を送ったのであった。)<sup>(5)</sup>

これらによると、空海は阿波国の大滝嶽と土佐国の室戸岬で虚空蔵聞持法によるきびしい修行をしたところ、虚空蔵菩薩が示現したというのである。観音菩薩と虚空蔵菩薩の違いはあれ、苦行の結果仏が現れたという点は空也と同じである。また、『空海僧都伝』に「炎夏の極熱には穀粒を絶って」とみえるが、『空也誄』にも「爰に粒を絶ちて像に向ひ」とあり、断食行を両者とも行っていたことがわかる。

空海の大滝嶽と室戸岬における修行はその後さまざまに伝説化されていくが、苛酷な修行によって仏の感応を得たことは『空也誄』にもみえており、空海の実体験とみてよいであろう。そして当時の辺地修行者はこうした神秘体験を得ることを目的の一つとして修行にはげんでいたのである。



#### 4 伊島

空也が観音菩薩に出会った湯嶋は、徳島県阿南市の伊島に比定されている。伊島は、四国最東端の蒲生田岬の東方海上約6kmにある島で、周囲は約9.5km、面積は3km<sup>2</sup>、西側に前島、棚子島がある。島北部の山頂に観音堂があり、観音堂の北・東は切り立った断崖になっている。島内の松林寺には空也が刻んだと伝える像高約70cmの十一面観音像がある。また、観音堂に至る道沿いに西国三十三カ所の写し霊場もある<sup>(6)</sup>。

瀬戸内海環境保全特別措置法第2条第1項などによると、和歌山県の日ノ御崎灯台と蒲生田岬灯台を結ぶ線から北が瀬戸内海の海域とされている。つまり、伊島は外洋から瀬戸内海に入る境界線上に位置し、またその付近は航路の難所だったので、観音菩薩が祀られたのであろう。同じく難所であった室戸岬の近くには津寺（第25番札所津照寺）があり、地蔵菩薩が祀られていた。平安時代の説話集『今昔物語集』巻17-6によると、船人たちは津寺に詣で、地蔵菩薩に結縁していた。このように、航路の境界や難所にはその安全を守る仏が置かれ、船人たちの信仰を集めていたのである。



観音堂



西国三十三カ所の写し霊場



伊島の案内図

【註】

- (1) 空也には全国各地に來訪傳承が残っている。愛媛県松山市の第49番札所浄土寺もその一つで、空也が3年間滞在したと伝えられ、鎌倉時代に造られた空也上人立像（重要文化財）が安置されている。
- (2) 『大日本史料』第1編14(50頁) 収載の『空也誄』をもとに訓読文と現代語訳を作成した。石井義長『空也上人の研究－その行業と思想』（法蔵館、2002年）にも『空也誄』の校訂文と訓読文が載せられている。
- (3) 石井義長『空也』（ミネルヴァ書房、2009年）。
- (4) 『弘法大師空海全集』6（筑摩書房、1984年）による。
- (5) 『弘法大師空海全集』8（筑摩書房、1985年）による。なお、『空海僧都伝』は真済の著作とする点には疑問が呈されているが、延喜21年（921）に弘法大師号が送られる以前には成立しており、空海を「まだ神格化せず人間的に取扱っている点」で重要な意義を持っている（『群書解題』2、続群書類従完成会、1961年）。
- (6) 山本準氏によると写し霊場は1911年に設置された（同「徳島県の写し霊場－西国三十三か所－」『鳴門教育大学研究紀要（人文・社会科学編）』19、2004年）。